

神のいつくしみの主日 (ヨハネ 20:19-31)

私も「わたしの主、わたしの神よ」と言いたい



福音朗読はトマスの信仰が深まっていく場面です。イエスのいつくしみが、それを可能にします。復活したイエスとはじめに出会った「トマス以外の」弟子たちは、イエスが手とわき腹とをお見せになると、主を見て喜んだのでした。

私は素直にこの出来事を喜べません。手とわき腹の傷は、他でもない、イエスが十字架上で逃げ去った弟子たちをゆるし、いつくしみを示してくださったしるしです。「申し訳ない」くらいの気持ちはないのでしょうか。とてもではないですが、私はすぐには喜べません。

ですから、トマスの「わたしの主、わたしの神よ」(20・28)という返事は、とても素直に聞こえるのです。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」(20・26)とは言ったものの、実際にその場面になったら実行するどころか、精一杯の申し訳なさを、「わたしの主、わたしの神よ」で表した。だから、中田神父には共感できるのです。

でもこの出来事は、両方があって成り立っています。すぐに申し訳ないという思いを表せなかった弟子たちと、申し訳ない気持ちでいっぱいの子トマスが一斉に揃ったとき、神様はどんなにいつくしみ深いのだろうか、皆が理解したわけです。「わたしたちもトマスのように言うべきだった。」大抵の弟子は、そう感じたのではないのでしょうか。

教会は、一本の映画が取れるくらい、いろいろな人が集まっている、と思うときがあります。司祭が変わると、教会との距離も変わる人。司祭が代わっても、自分を変えずにいつも教会との距離が同じ人。ふだんは教会に近づかないのに、スポーツになると中心にいて活躍する人。教会の改修で物入りになると、さっと転出する人さえいます。

私がいちばんひどい目にあったのは、「この人はとても良くしてくれる」と見込んでいた人が、外では私の悪口をぶちまけていた。これを知ったときは唖然としました。私に人を見る目がなかった、そのことにつきますが、私よりはるかに人を見る目のある人が辛口の批評をしてくれるようになってから、どんな人でも教会を形作っている人だとはっきり理解したのでした。

かつては手の裏を返されたり、はしごを外されたりして怒り、苦しんだりしたわけですが、ある時からテレビでドラマを見るようになり、学びました。多くが韓国ドラマ、朝鮮王朝時代のドラマですが、登場人物は善人ばかりでもないし、悪人ばかりでもないのです。いろいろな人が登場して、見ごたえのあるドラマになります。表と裏のある人たちが、いい仕事をしてドラマを引き立てます。

教会もドラマなのではないか。そう思えるようになったとき、教会にいろいろな人が出たり入ったりして、面白い教会になると気づきまし

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

た。もちろん、善人ばかり集まった教会であれば、天国の教会のようでしょうが、ここは地上の教会だなど実感するのは、なびく人もなびかない人もいるからです。その中で、一定の方向に皆を向かせるのが、主任司祭の腕の見せ所だと思っています。

今週の9時のミサに、浜脇教会の代表と、信徒たちが来てくれます。彼らは新しく、福江教会の家族となります。浜脇教会のほうが、歴史も、迫害の過酷さも、そこから育まれた聖職者・修道者の数も、きっと多いと思います。

「イエス様の手とわき腹を見なければ、私たちは福江教会の巡回教会になれない」あるいは、「イエス様の手とわき腹を見なければ、私たちは浜脇教会を巡回教会として受け入れられない」一部分の人はそう思っているかもしれません。

それでもここに集まった信徒皆が、「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」(20・29)このみことばを体験するために、集まってくれました。新しい家族として一つの教会が歩き出す。その時神のいつくしみはより深く注がれる。わたしはそう信じています。

今日は「神のいつくしみの主日」と呼ばれ、特別に神のいつくしみを味わえる日曜日に違いありません。神のいつくしみは、いろいろな人が集まる中に注がれます。歴史も、背負っている背景も、それぞれ違いますが、神のいつくしみは違いを超え、違いをうまく調和させ、さらに味のある教会にしてくださいませ。

今日はそのことを、ささやかですが拝領祈願後に、合併の覚書を交わして、一つの小教区として歩いていく決意表明にしてもらおうと思います。神のいつくしみが、私たち教会家族をさらに豊かにしてくださいませ。ことを信じて、ミサを続けていきましょう。

復活節第3主日(ルカ 24:13-15)